概　要　報　告

実　施　期　日	令和７年８月５日（火）
部　会　名	小学校　社会部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『問いを生み出し、追求する単元構成』

提案概要

第６学年「我が国の歴史上の主な事象」の学習を通して、児童が「歴史を学ぶ楽しさ」や「学ぶことの大切さ」を実感できる授業改善をめざした実践である。本実践は、学校教育目標「自ら学び、共に高め合う子どもの育成」の具現化を図り、児童が問いをもち、対話を通して深く考える学びの構築をねらいとした。

政治の学習では社会とのつながりを実感し意欲的だった児童も、歴史では「覚えるもの」と捉える傾向があった。そこで、歴史を自分事として学び、知識をもとに考え、伝え合えるよう、教材提示や単元構成を工夫した。導入では戦時下に発刊されていた漫画「のらくろ」や戦時下、藤沢市に住んでいた小学生が書いた作文、教諭の手紙などを活用し、当時の人々の思いや価値観に共感する視点を育て、児童の問いを引き出した。単元構成は「つかむ→調べる→考える→深める→まとめる」とし、教科書は「覚えるもの」ではなく「自分の考えを話すための資料」として活用できるようにし、児童が自由にページを行き来して根拠を探すことを大切にした。

授業後の振り返りでは、「命を軽く見ている」と否定的に捉えていた児童が、「当時の人々にも理由があったのでは」と想像を巡らせるなど、感情と知識を結びつけて考える姿が見られた。また、「反論されても意見を言いたい」と話す児童も現れ、自己表現への意欲を高める変容が確認された。

一方で、問いをもつ経験が少ない児童や、話合いが複雑になることで参加が難しくなる児童への支援は今後の課題である。問いづくりを支える教材提示や、意見を整理する時間の確保、言葉の意味の揺れに対する指導の工夫が求められる。

本実践は、児童が歴史的事象を自分事として捉え、学び続ける姿を育てることをねらいとしたものである。社会科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、問いを原動力にした学習の価値と可能性を改めて捉え直す機会となったと考える。

質疑応答

Q　単元で抑えなければならない部分をおさえながら進めるのが難しいと思うが、掴むという部分で１時間目の流れはどのように進めているか。

A　１時間目に気になるところを出させ、教師と単語の意味を抑える、２時間目に問いを作るという流れではあるが、単元のどの場面でも教師側が、単元の学習に必要な知識をおさえた上で学習を進めた。

協議の柱及び協議概要

質問作り体験　参加者で４人グループを作り、中学校の部で提案された教材「質問作り」の擬似体験を行った。あらかじめ提案者が、協議グループごとにテーマを設定し、参加者が質問作りを行った。

研究協議　　協議の柱『楽しく深く学べるための問いを生み出すための授業づくり』

協議では、児童が問いを立てる行為そのものに価値があるという意見が多く出された。問いを構想し、共有・対話を通して深めていく過程が、思考力や主体性を育むとの認識が広がった。授業づくりとしては、児童の体験を起点にすることや、教材・資料の工夫、授業全体のストーリー性、視覚的手立てなどが効果的であるとされた。児童が「問いたくなる」状況をつくることが授業者の重要な役割である。

また、深い問いを生むには基礎的な知識の土台も必要であり、子どもにとって開かれた問いを意識的に扱う工夫が求められるとの意見も出た。価値観を揺さぶる問いや実生活とつながる問いは、学びを自分事として捉えやすくする。

一方で、問いを立てることが難しい児童への支援や、思考を整理する時間の確保など、学びのハードルを下げる工夫も今後の課題として挙げられた。

まとめ概要

本年度の研究では、「楽しく深く学べる問いを生み出すための授業づくり」をテーマに、児童が思考と対話を通して学びを深める姿を目指し、実践と協議を重ねてきた。

児童にとって「問い」は与えられるものではなく、自ら生み出したくなるものである必要がある。そのためには、教材や資料が児童の生活に近く、考えたくなるような疑問を引き出すことが重要である。本実践における漫画を導入に用いた授業では、児童の興味を喚起し、問いが自然に生まれていた。

協議では、「問いをつくることの難しさ」や「知識がなければ問いは生まれないのでは」という課題意識が共有された。一方で、知識に偏りすぎると学びが受け身になりやすくなり、問いを生み出す過程にこそ価値があるという認識も高めることができた。必要な知識を教師が示し、児童が「もっと話したい」と思えるような構成や資料提示が求められる。

また、それぞれの問いを共有することで児童は他者の視点に触れ、対話の中で学びを深めていく。さらに、教科書や資料を説明の補助ではなく、根拠をもって考える出発点とすることで、児童の思考が深まりやすくなる。今後は、問いを立てることを目的とするのではなく、問いを通して何を考えるか、どう学びを広げていくかに焦点を当てて授業を構成していく必要がある。また、資料や情報を教師が準備するだけでなく、子ども自身が必要な情報を取捨選択し、学びの責任を担っていくような姿も見据えていきたい。

本研究を通して、問いを中心に据えた授業づくりは、思考・対話・内省を往還させる豊かな学びのプロセスを生み出すものであることがわかった。問いを立てて、また問いを通して他者とつながる。そのような授業が、楽しく深く学べる学びに根付かせていくと考える。